が残っているという。

三十三　ルカによる福音書二章二一節、割礼と言う習慣がない日本人にとって、この宗教儀礼は理解できないものであったことがうかがわれる。

三十四　マタイによる福音書二章一節〜、聖書の記述には占星術の学者たちとしか書かれておらず、人数やその出自も記載されていない。

三十五　「神を礼拝する者に対しては、その悪人道も神は消し去ってくれる。その後、正しい道が示され、思うがままの正しい道を歩むことが出来るようになる。キリシタンたちを迫害する人々は悪人道を歩み、神を礼拝する潜伏キリシタンたちには正しい道が示され、救いの道を歩むことができるという希望を示したものと解釈することができよう」宮崎一九九六年、八五頁。

三十六　マタイによる福音書二章四節には「王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて（中略）問い正した。」とあり、二人という記述はない。イエスを十字架刑に処する総督官が、ポンテオ・ピラトである。マタイによる福音書二七章一節〜。

三十七　マタイによる福音書二章一三節〜、ヘロデが子供を皆殺しにする計画を伝えるのは主の天使、それを聴くのはヨセフ、そして聖家族はエジプトに避難するのであるが、『天地』では養父ヨセフの存在は皆無である。

三十八　マタイによる福音書二一章一八節〜二二節。聖書では、無花果の木を呪う話。長崎県生月市根獅子町のカクレキリシタンには「おろくにんさま」伝承の中に麦作りの話が残っている。

三十九　マタイによる福音書三章一三節〜。

四十　洗礼を受けたものは皆天国に行けるという信頼は、「普段は仏を拝まされ、神々を祀らされ、踏み絵を踏まされて神を裏切っているとしても、洗礼だけは受けている潜伏キリシタンたち」にとって寛大な赦しの言葉として語り継がれた。宮崎一九九六年、八七頁。

四十一　タボル山については旧約聖書士師記四章六節に記述がある。しかし、この個所はマタイによる福音書四章一節〜「悪魔からの誘惑」とマタイによる福音書一七節一〜九節参照。

四十二　仏教語が適用されている。御法身体は「出家」と解釈される。

付記

字数の関係上、『天地始之事』を二回に分けて掲載する運びとなった。次号に続く後編を含めた目次を記す。

長崎に伝承される聖書物語『天地始まりの事』現代語試訳

長谷川（間瀬）恵美

目次

はじめに―その現代的意義―

（前編）

① 天地の始まり
② 悪の実、中天に追いやられる
③ 神、人類救済のために分身を世に送る
④ ルソン国の帝王の死
⑤ サンタマリアの受難

（後編）

⑥ 朝五カ条の祈り
⑦ ヘロデ、国内を吟味する
⑧ 主、捕えられる
⑨ 主、連行される
⑩ 金に目がくらんだ盲人の話
⑪ 救世主
⑫ 主の初救済
⑬ 主、役割を与える
⑭ 黙示録
⑮ 追記

おわりに

参考文献

註

十一　『天地』では「エワとアダン」のように女性が先に記される。

十二　表面的には仏教徒（異教徒）として装うことを余儀なくされていた隠れキリシタンにとって、彼らが求めた精神的支えとなる、寛大な神（デウス）の像が描かれている。しかし、そのためにタブー（「悪魔（仏）を拝んでも…してはならない」）が課された。宮崎一九九六年、八一～八二頁。

十三　いつかは天国に召されるという希望が語られる。また、ここには、「原罪」の概念（創世記三章二〇～二四節）は伝承されていないことが分かる。黒崎地方の隠れ切支丹に伝わった「バスチャンの預言」には、潜伏の苦しみは七代までで、その後は黒い船に乗って伴天連が来日し、信仰の自由が得られると、語り継がれた。

十四　黒崎地方で重宝されている滑石片岩のこと。五島へ移住したキリシタンは石を船に積んで持って行ったという。世界即郷土という世界観が表現されている。

十五　日向之高千穂の山頂の「天の逆鉾」になぞらえられている。〔〕の箇所は、谷川著より補足。谷川一九八二年、一六〇頁。

十六　兄が妹に櫛を投げる箇所は、記紀神話に書かれているイザナギ命が、縁を切るため妹のイザナミ命に櫛を投げた黄泉の国での様子になぞられている。次の箇所、親近相姦とその非人間的な禁制について田北氏は触れていない。

十七　殉教して聖人の位に挙げられた教皇 Pope Martyr。バスチャン歴には、「ハッパ丸し」と記載されている。

十八　創世記六章～ノアの洪水物語りであるが、獅子が船に乗り遅れた足の悪い兄を助けたという話は、信仰によって救われるというメッセージを付加している。また、津波によって島が海底に沈んでしまう「洪水伝承」は、各国に存在している。

十九　ルカによる福音書一章五節～洗礼者ヨハネの懐妊はマリアへのお告げよりも先である事が忠実に物語られる。キリシタンにとって、「水の役」（洗礼者）がいかに大切な存在として理解され伝えられていたかが理解される。

二十　ルソンの国（フィリピン）は、当時日本との貿易で栄えていた国である。『天地』では、イエスの養父ヨセフは一切登場しない。

二十一　この個所は「かぐや姫」を想像させる物語り。帝王の名前「サンゼン・ゼジュズ」は、祈りの終わりに唱える「アーメン・イエズス」が訛りと転訛したものと考えられている。後編で御身（主）が洗礼名を与えられる際、重要となるのが、この帝王の名前である。丸やが、貧しい大工の娘であり、幼少のころに母に死に別れて、父親の手によって育てられたという説もある。谷川一九八二年、一六六頁。

二十二　びるぜんの行（処女でいる修行）は仏教的な発想である。

二十三　黒崎地方では、クリスマス前夜にアベ・マリアの祈りを十二篇唱える。これは当時の宣教団体フランシスコ会の形跡、習慣として今日も残っている。

二十四　食事が天から与えられるのは、食物の不自由な生活との関係か、もしくは使徒言行録十章十節～ペテロに天から食事が与えられたことの応用。

二十五　カトリックの正伝では、マリアのお告げを受けた貴族が、三六五年八月五日の朝にローマの郊外に雪の降ったところを発見し、そこにサンタ・マリアの教会を建てている。現教会歴では八月五日が「雪のマリア」の祝日である。

二十六　雪のサンタ・マリアについてはキリシタンの日繰帳にも記されている。そこには、「聖マリアの雪殿」とあり、マリアは日本的な「雪」という人名となっている。

二十七　ルカによる福音書一章二六節～。

二十八　蝶は人間の魂のかたどりであるという考えが古くから伝えられている。受胎告知の場面の日本的な表現が見受けられる。

二十九　ルカによる福音書一章三九節～。

三十　ルカによる福音書一章四七～五五節では、マリアの口からはマグニフィカート（讃歌）が唱えられるのだが、『天地』では丸やの口から「主の祈り」が唱えられている。

三十一　断食（ゼシン）とは、斎戒・断食のことで、キリシタンは、特にその信心行を重視した。

三十二　黒埼地方では、現在でもナタル（生誕祭クリスマス）の前の晩は、牛小屋を掃除して、新しい藁を引いて牛に御馳走をする慣習

主要文献

田北耕也（校注）「天地始之事」、『キリシタン書・排耶書』一九七〇年、岩波書店、三八一～四〇九頁。

参考文献

遠藤周作「日本の泥沼の中で―かくれ切支丹考」『切支丹時代』一九七九年・一九九二年、小学館、一四四頁。

片岡照子「天地始之事―キリシタン土着化への一つの試み―」白百合女子大学研究紀要一九七五年、一一号、一三～三二頁。

河合隼雄「日本人の宗教性とモノ」、『日常性のなかの宗教』一九九一年、南窓社、一八～二九頁。

谷川健一「わたしの『天地始之事』」、『谷川健一著作集一〇』一九八六年・一九九五年、三一書房、一三五～二四〇頁。

寺石悦章「『天地始之事』における場所のイメージ」四日市大学総合政策学部論集六、二〇〇七年、三七～四七頁。

長谷川（間瀬）恵美「隠れ（Crypto）の信仰・生き方に学ぶ―キリスト教の実生化―」遠藤周作研究第四号、二〇一一年、（一）―（一六）頁。

松藤英恵「キリシタン書『天地始之事』第一節とキリシタン絵画『聖ミカエルの聖絵』に於けるルシフェルのイマージュ」日本比較文学会二〇〇〇年、四三号、七～二一頁

宮崎賢太郎「『天地始之事』にみる潜伏キリシタンの救済観」宗教研究七〇号、一九九六年、七三～九六頁。

注

一　田北一九七〇年、三八一～四〇九頁。

二　谷川は「思想は風土に受肉されてはじめて真に思想の名に価する」という。私は、氏の主張に同意する。谷川一九八六年・一九九五年、一三五頁。

三　松藤は、『天地』を逸脱だという発想は現代の視点からのみなされたものであると批判する。松藤二〇〇〇年、八頁。

四　遠藤一九七九年、一四四頁。

五　以下は、著者によるこれまでのカクレキリシタンについての研究。「キリスト教の実生化―今を生きるキリシタンに学ぶ―」『宗教研究』日本宗教学会二〇〇六年、第七九巻三四七、一二三～一二四頁。「日本におけるキリスト教の受容と理解―根獅子キリシタンの場合―」『教会と宣教』日本福音ルーテル教会東教区二〇〇六年第一二号、六四～八一頁。

六　「キリスト教の実生化―茨木カクレキリシタンに聴く―」『宗教研究』慶応宗教研究会二〇〇九年第二二集六〇～六八頁。

七　「隠れ（Crypto）の信仰・生き方に学ぶ―キリスト教の実生化―」『遠藤周作研究』遠藤周作学会、二〇一一年第四号、（一）-（一六）頁。

八　キリスト教の天上位階を無視し、仏教の三十二相好に対抗した記述が展開される。つまり、仏の相数を意識してデウスの優越を記述している。

九　ポルトガル語の音の響きを大胆に転換し、思想的にも自由に解釈している。隠れキリシタン独自の宇宙観が形成されている。

十　天使の長ルシフェル（文中では「じゆすへる」＝サタン・悪魔）の存在は聖書には記述されない。『天地』では、エヴァを誘惑するのは蛇ではなくルシフェルである。日本では蛇は龍に近しい神聖なる存在であるため、悪魔として伝承されたと理解できる。また悪魔のイメージは、後編に記される「仏」にも重なる。天使の長ルシフェルのイメージはイザヤ書及びダンテ『神曲』のサタンの像と一致すると松藤は指摘する。松藤二〇〇〇年、一〇～一二頁参照。

仏教世界の中心にある須弥山には三十三天（神々）が住むという、三十三は重要な数。

創世記四章一～一二節、アダムとエヴァの子どもはカインとアベルの兄弟である。『天地』では、ちころう（次郎）たんほう（太郎）という「男女」に変容している。これは、後述される日本神話のイザナギ、イザナミの兄妹神話へと続く。

も国を追われて流浪することになる。いかがなものか。」両家老は「それはどうしたことでしょう」と答えた。王は「いや、たかが、生後十四、五夜の子どもだ」というと、家老は「その餓鬼、恐れることはありません。私たちが行ってつまみ殺してきましょう。王はどうぞ心安らかにいらしてください」と言って、急いで出発し、野山・川を越えて、村々・家一軒も残さず探し回った。

御主は事の次第を知らせ、丸やとともに、逃避することとなった。[三十七] 何処へともなく行くと、麦作りの大勢の人に出会った。[三十八]「皆様にお頼み申します。私たちの後から追手がやってきます。どうぞ、私たちは、この麦を蒔くころに通ったと言ってください」と頼むと、麦作りの人々は「今から麦を蒔くのに、この麦を蒔くころとは、おかしなことを言う」と笑った。後日、この麦は出来なかったという。

そこを過ぎると、また麦作りに出会ったので、以前と同じことを頼んだ。すると、「了解した、そのように言おう」とこの麦作りは受諾した。御主は喜び、この麦はすぐに実るだろうと思い、逃げた。

そこへ、追手が来て「麦作りの奴等ども、落人が二人通らなかったか」というので、麦作りは「はい、この麦を蒔いた頃に通りました」といってその麦を見ると、もう色がついて実っていた。これを聞いた追手の者は、力を落としてそこから引き返して行った。

二人の落人は、危ういところをやっと逃れて、パウチズモ（洗礼）の大川に到着した。そこで三ジュワン（聖ヨハネ）に出会った。「あなたは何処に行かれるのですか」と問うと、三ジュワンは「私は御主に御水を授けるために、七カ月先に生まれたのです。」と答えた。御主は喜び、「それでは、この川の中で私に洗礼を授けて下さい」と願った。[三十九] この時から御主は、ジュス・キリヒト（イエズス・キリスト）と敬われる。それにしても、きれいな名水であった。

御主が、悪人の来生の救済のためにこの水を分流しよう、と思い召されると、川は四万余筋にわかれた。その川の裾で洗礼を授かったものは、皆パライソの快楽を受けることができるということ、これは真実である。[四十] それから、主がタボロ（タボル山）というところに到着したのは、四〇日目であった。[四十一]

天のデウスは、下界にいる分身である主を召し寄せたく思っておられた。そこで御身（主）は、自ら天に上られデウスと面談された。デウスは位を得させ、冠を渡され、御身はそれをいただいて天から下り、元のタボロ山に下り、ここで御法体されて、ゼゼ丸や（ゲッセマネ）の森の中の御堂に入られた。[四十二] 五〇日目であった。

御主が、この日から学問を始めると、サガラメント（サクラメント・秘跡）が天から下り、七日七夜、ご指導され、（主が）上達された後、天に帰られた。そして主は十二歳になるまで学問を続けられた。

（前編終わり、後編に続く。）

た。

仕方なく、サンタ丸やは我が家を後にして、途方もなくたたずみ、何処に行くともなく野に、山に、他の家の軒下にたたずんで難儀を偲んだ。二月の中旬に、丸やはベレン（ベツレヘム）の国に、迷いこんだ。その頃大雪が降り出し、しばらく身を休ませようと牛馬の小屋の隙間に身を縮めて寒さを凌いだ。昼八時頃から断食され、夜半ころに御身様がご誕生された。[三十一]

時は寒中であり、左右にいる牛や馬が息を吹きかけて御身様（主）が凍ってしまわないように、体を温めた。また、牛馬の情けを受けて、その食み桶で産湯をした。それゆえ、水曜日は、畜類・鳥類を食べることが禁じられている。[三十二]

三日後、御身はお湯につかることを望まれた。その後に、「あなたの息子も、この湯に入りなさい」というと、「その御心は嬉しいが、家の息子は瘡のために、痛みがひどく、命も危ういほどなので、入れません」という。それでも、「是非に」というので、その湯をかけると、たちまち（息子の）瘡は癒され、命を取り留めた。

八日目になると、主はこの世の恋や無情を思って未練の心も出るので、割礼をうけ、御血を流された。これを見た母丸やは、驚きすがりついて泣かれた。[三十三]

しばらくして、トルコの帝王メンテウ、メキシコの帝王ガスパル、フランスの帝王バウトザル、三人は、お告げを聞いて、それぞれ出国した。[三十四] しかし不思議にもその道すがら三本辻で出会った。そこで三人は共に標された道しるべの星を目指し、ベレンの国に着いた。

その国は、帝王ヨロウテツ（ヘロデ）の支配下にあったので、三人は立ち寄って尋ねた。「この国に御主が誕生するという天からのお告げがあったので、こちらに参上しました。どうぞお教えください。」すると、帝王は、「そのようなことは、聞いてない」と答えた。三人は「帝王も、ご一緒に拝みに行こうではありませんか」と誘ったが、「いや、結構である。まずは三人でご出発あれ。」という。「それでは、そうしましょう」と三人は出かけた。しかし、おかしなことに道標の星は見えなかった。

「ここに立ち寄ったからだろうか、残念だ」と、三人は一緒に天に向かって手を合わせて「どうか光を照らして下さい。」と願うと、目当ての星が手に取るように見えた。急いで道を急ぐと、間もなく到着し、そこで礼拝した。時は十三日目だった。

「あなた方は、どこから来たのか。」と御主は尋ねた。三人は「御主の証の星に導かれて、ここに参りました」と答えた。御主は「三人が来た道は悪人道なので、今はもう消えてなくなっている。[三十五] これから、三つの道をつくるから、それをたどって帰りなさい」と仰せになった。「ハッ」と、ひれ伏して待つと間もなく天のつり橋が三筋かかり、三人はそれぞれの道を通って自分の国へと帰って行った。

さて、ベレンの国の帝王ヨロウテツは、ポンシャ、ピラトという二人の家老を呼んで質問した。[三十六]「我が国に、天から主が生まれたと聞いたが、そのままにしておけば、いずれこの国が攻め取られてしまう。そのようなときは、私をはじめ、そなたたち

ルソン国の帝王の死

雪がやむと、帝王は夢から覚めたような心持で、「丸やはどこに行ったのだ、丸や、丸や」と言われるが、丸やは天に昇られた後であるので、訪ねることも出来ない。想い焦がれた帝王は、おいたわしくも遂に亡くなられた。

天に昇られた丸やは、デウスの御前に畏まった。デウスは「処女丸やよ、どうして（天に）来たのか」とお尋ねになられた。丸やがことの次第を話すと、デウスはとても喜ばれ、「良く来た、さあ位を授けよう」と、仰せになり、雪のサンタ・マリアと名付けられ、天から下らせてもとの家に戻した。[二十六]

ある時、（丸やが）書物を御覧になっていると、不思議なことに、「主が使わされよう」という文字があらわれた。さてさて、どこに御出現されるのかと待っていると、まもなくガブリエル天使が天から下られた。[二十七] 処女丸やの前に跪き、「（私は）この度、御主によって天から使わされました。あなたの、清い御体をお貸しください」と言った。丸やは答えて「どこに（主が使わされるのか）、と案じましたが、この体においで下さいますのか」と喜び、「どうぞ御心に適うままに」と受け入れた。天使は「二月中旬に、天から下りますので、よろしく頼みます」と言って帰られた。

二月中旬になり、（丸やは主が使わされるのは）まだかまだかと、身を謹んで待ちわびた。その夕暮れに、聖霊が蝶の装いで天から下り、処女丸やのお顔に移り、「花冠の聖丸や」、とその口に飛び込んだ。[二十八] こうして丸やは懐胎され、四カ月ほど過ぎると次第に身重になられた。

臨月が近づいた叔母のエリザベトは、さぞかし苦しいだろうと、丸やは見舞いに訪ねた。[二十九] エリザベトもまた、丸やの懐胎のことを心配して、見舞いに訪ねた。二人は、あべ川で出会った。エリザベトは「ハッ」と手をとり、祈りを唱えた。「めでたし聖寵満ちみてる丸や、主、御身と共にいます。御身は女の内にて祝せられ、御胎内の御身も祝せられ給う。」それをきいて、丸やは、「天にまします我らの御親、御名を尊ばれたまえ、御国を来らせたまえ。御心が天になるごとく地にもなさせたまえ、我らの日々の糧を」[三十] と応じた。すると、丸やの体内の御子に二人の言葉が聞こえ、ご誕生後にコンリキのガラッサ（御功力の祈り）として完成されて唱えられた。これはあべ川でつくられた祈りであるので、アベ・マリア一結びの祈りという。二人は、この川で、いろいろ話をされて別れた。

サンタマリアの受難

こうして丸やは急いで我家に帰った。しかし丸やの両親は、娘の懐胎を知ると大変怒って、「おまえは帝王を嫌って、一体だれの子を身ごもったのか。その低落には納得できない。このことが帝王の耳に入ったら、この親までも滅亡だ。この家に足を踏み入れることは許さない、早く立ち去れ」と身を震わせて叱っ

ルソンの国の帝王は妃の候補を探していたが、思いに適う女を見つけることができなかった。国内の丸やのことを聴くなり、すぐに家老達を使わした。丸やの両親はかしこまって、「御心にお任せいたします」と承諾した。しかし、丸やは一行に承諾せず、このままでは埒が明かないと、家老は無理に丸やを王の前にさし出した。

帝王は、丸やを見るととても喜んで、「聴いていた以上の器量者だ、これからは私に仕えてくれ。」と仰せになった。

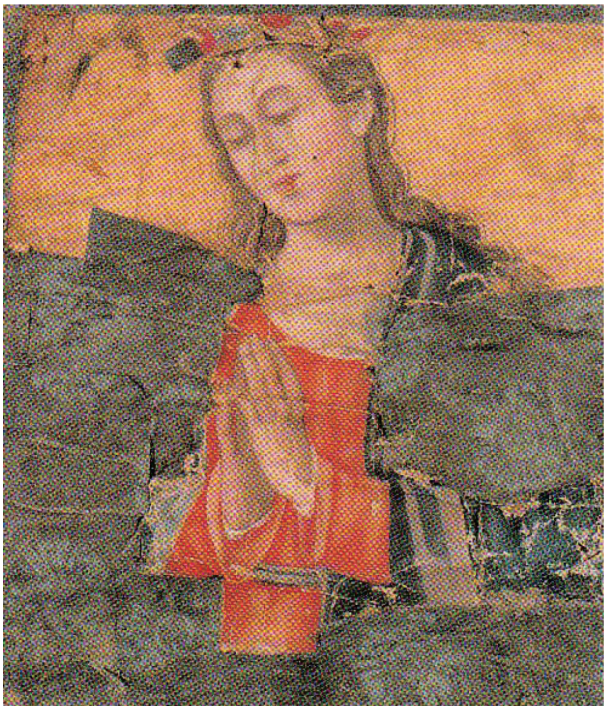
丸やはそれを聞くと「仰せになることは、ごもっとも。しかし、私は大願の望みがあるので、この身を汚すことはできません。」という。

それを聞いた王は、「どんな望みも適えてやるから我が妻となれ」といった。

丸やは「王には、霊的な位がなく、この世の栄華のみ携えていらっしゃいます。それより来生の救済こそが大切です。」と答えた。

それを聞いた帝王は「そなたは、凡人であろう、いかなる位を持っているというのか。我は王であるぞ。来い、見せるものがある」と言って、宝蔵から金・銀・米俵、また、金の屏風・貝の錦、十間の緋色の練絹、珊瑚の珠、瑠璃の香箱、瑪瑙・琥珀の細工物、伽羅や麝香・沈香の香りの玉の鼓を見せ、「金銀をちりばめた屋敷に暮らし、これらの品々、すべて気に入ったものを、そなたにやろう。」と言った。

しかし、丸やは宝には目をむけず、「それらの品々は、この世の宝です、使い尽くせば無益でしょう。それでは、私の技をお見せしましょう」といって、心の内に念願をこめて合掌すると、天はこの祈りを聴き、眼前に食膳の品を現した。[二十四] これを見て、王をはじめ、居合わせた人々は奇異の思いを募らせた。王は「何と、不思議。他に何か奇妙なことができるのか。」と問うた。すると盛夏であるというのに、空はぱっと曇り、雪がチラチラと降り始め、積り始めた。王を初め、居合わせた人々は体をこわばらせ、口もあかず、ただ茫然とする有様であった。その間に、天の花車に乗って、丸やは、すばやく天に昇られた。[二十五]



雪のサンタ・マリアの聖画（日本二六聖人記念館蔵）

に実ったものはすべて自分のもののように盗み取り続けた。デウスは、天から下られて、彼ら天の邪鬼を海の底へ封じられた、この三人の悪党はルシフェルの仕業であった。

人間が多くなるにつれ、人々は盗みや、慾から離れることができず、悪に傾いていった。悪事が募るにつれ、デウスはそれを憐れんで、パッパ・マルジ帝王にお告げを授けた。[十七] それは、「この寺の獅子（狛犬）の眼が赤色になった時、津波が来て、世は滅亡する」というお告げだった。帝王は毎日寺に詣でた。手習いの子どもが集まって「どうして獅子を拝むのか」と聞くと、脇の子どもが「獅子の眼が赤色になる時に、この世界は波にのまれて滅亡するんだ」と答えた。子どもはそれを聞いて笑い、「そんなおかしなことがあるものか。塗ったらすぐに赤くなるけれど、滅亡なんて考えられない」といって、獅子の眼を赤く塗った。

マルジ帝王がいつものように参拝すると、獅子の眼が赤かった。それを見て、「はっ」と驚き、かつて用意していた刳舟に六人の子どもを乗せた。残念なことに、足の悪い兄はそこに残した。そうこうする間もなく、大波が天地を驚かせながらか一寸の猶予もなく押し寄せ、辺りは一面の大海となった。[十八] 先の獅子が海の上を走り、乗り遅れた一人の兄を背中に乗せて助けた。

水は三時に引き、刳舟に乗った人々は島に漂流して休んだ。そこへ獅子が、兄を背に乗せてやってきた。波に溺れて死んだ数万の人々は、地獄に落ちた。

神、人類救済のために分身を世に送る

刳舟に乗って、九死に一生を得た帝王とその子ら七人は、その島を住処と定めたが、夫婦の極めがないために、女は眉をそり、歯に鉄かねを付けることをこの時から始めた。増え続ける人間は、生まれては死に地獄に落ちた。

デウスはこの次第を憐れみ、「天使よ、人間をいかにして助けようぞ。」と問うと、天使は答えて「デウスの分身を世に送られれば、助ける道もありましょう。」と言う。そこで、デウスは御子を分身とした。

ガムリヤ（ガブリエル）という天使が御使いとして下界に下った。その後、ジュアン（ヨハネ）が洗礼の役として下られ、八月中旬にイザベルナ（エリザベト）の体に宿られた。彼女はそのとき五三歳であり、洗礼者は五月中旬にご誕生される予定である。[十九] オラショ（祈り）を五三回唱えて一繰とするのは、彼女の年齢の故である。

ルソン（フィリピン）の国の帝王でサンゼン・ゼジュズという王様がいた。[二十] また、その国に、身分の低い娘で丸や（マリア）という、七歳から学問を志し、十二歳で上達した娘がいた。[二十一] 丸やは、毎日、世界の状況を案じ、人間界に生まれた後の来生の救済はどうなるのかと思い続けていると、「汝が一生、独身で、処女の行を積めば、健やかに救済しよう」[二十二] という、不思議な天からのお告げを受けた。ハッと喜んだ丸やは、地に伏して礼拝し、十二編の祈りを唱えた。[二十三]

の御前にひれ伏した。「おのれの悪心からこのような姿になってしまいました。このままではとても恐ろしいので、どうぞ天国に入れてください」と願い出た。しかし、デウスは、「汝は悪性であるから、天には入れられぬ。下界ではエワの子どもが後悔して過ごしているから、こちらにも入れられぬ。雷の神となれと、十相の位を与え、中天に住むことを許した。

悲しいことに、ルシフェルを拝した天使たちは、皆、天狗となって中天に追いやられた。

長崎歴史文化博物館蔵
大天使ミカエルと槍で突かれた悪魔
嶋崎賢児撮影

悪の実、中天に追いやられる

デウスの御思案によって、天にも下界にも争いのもとになるマサンの悪の実は、中天の天狗のところに送られた。

さて、立ち分かれたエワの子ども〔兄は妹が恋しくなり、妹は兄が恋しくなり、声の限りに叫びながら歩いた。その声は、谷で叫ぶと山にこだまし、山で叫ぶと谷にこだまし、二人は力の限りに叫んで歩いた。それを見かねたデウスが手裏剣を投げおろすと、山の高みに突き立った。[十五]〕は合石の石のほとり（黒崎・出津）で出会った。これこそ、前に知らされたデウスの不思議な知らせかと、二人はとても驚いた。抜身の剣の光に照らし出されてお互いの姿を認め合った二人は、嬉しさのあまりに走り寄り、女は針を投げ、男は櫛を投げた。女が投げた針は男の頭に突き刺さり、血が流れた。その血が止まらないので天に向かって願をかけ、「一生夫に従います」と誓うと血は止まった。再びその剣を振ると、兄弟の縁は切れて夫婦の契りが結ばれた。こうして恐ろしい道を知り、双子ばかり十二回身ごもった。〔故に親近結婚は良くないと言われる。[十六]〕

それから次第に、人間が増えて食べ物が足りなくなったので、（人々は）天に向かって祈りをささげ、「食べ物をあたえてください」と願うと、デウスが空に現れ、籾の種をお与えくださった。その種を雪の中に蒔いた。翌年六月にはよく実り、八株に八石、そしてその冬には九石実った。それから、八穂で八石の田植え唄が歌われるようになった。その後、兵糧が多く蓄えられるほど豊作となった。

しかしその後、悪心慾心の世の中となり、運慾・貪慾・我慾という三人が生じ、善人の食物を自分の欲しいままに盗み取った。デウスはそれを憎まれ、三人を二つの体にとじこめた。その三つの顔には角が生え、その形相はすさまじく、彼らは田畑

たがお口にされているものはなんですか」
と尋ねた。ルシフェルは
「これは、マサンの実である」と答えた。エワはそれを聞いて驚いて
「それは、禁じられているものと聞いていますが、食べてもよろしいのですか」
と聞いた。ルシフェルは
「このマサンの実は、デウスと我ルシフェルのものである。これを食べれば、皆がデウスになるので禁じられているのだ。」
と偽った。エワはそれを聞いて、「そうでしたか」と納得した。ルシフェルは、まんまとしてやった、とほくそ笑み、マサンの木の実を（エワに）手渡して、「さあ、これを食べて、我ルシフェルのように偉くなれ」と勧めた。エワは喜んでそれを食べた。
　ルシフェルは「これはアダンに食べさせよ。そして子どもを急いで連れてまいれ」と言い、帰る素振りをして、木陰に隠れた。
　アダンが戻ると、エワは今あったことを話し、残りのマサンの実を（アダンに）手渡した。アダンは疑いながらも手にとって食べた。
　そこに不思議にも、デウスが何処ともなくやってきて「アダン、どうしたのだ、それは悪の実であるのに」とおっしゃった。アダンはハッと仰天して、吐き出そうとしたが、喉に引っ掛かり、その甲斐なく、エワもアダンもたちまちに天に入る快楽を失った。（二人は）すぐにサルベ・レジナ（挽歌）を唱えて天に叫び、地に伏して、血の涙を流して千回悔いたがその甲斐はなかった。これが「罪の告白の祈り」の始まりである。
　ほどなくして、（二人は）デウスに向かって「どうぞ、なにとぞもう一度、パライソに入ることをお許しください」と願い出た。デウスはそれをお聞きになり、四〇〇年、後悔を続けよ、その時にパライソに戻そうと仰せになった。[十三] しかしエワには、「中天の犬になれ」と蹴飛ばされ、行方知れずとなった。
　その後、エワの子どもは、「もう一度天に入れる」という望みを託しながら、下界に住み、畜生を食べ、月星を拝み、後悔しながら過ごした。下界には、合石という石があった。この石を探して、そこに住む者には必ず不思議な恩恵があるといわれる。即ち、それはこの世界（黒崎・出津）である。[十四]
　隠れたルシフェルは、鼻が長くなり、口はさけ、手足は鱗だらけになり、角を振り立て、すさまじい容姿になって、デウス

長崎県、下黒崎町　著者撮影

長崎に伝承される聖書物語『天地始之事』

天地の始まり

デウス（神）とは、天地の御主、人間・万物の御親のことである。一つの光の下から、二〇〇相の位、四二相の装いを持つが、もともとは一つの光を分けたようなもの、つまり太陽のようなものである。[六]

デウスは、十二の天を創造された。その名は、リンボー（地獄）、マンボー・オリベテン・シダイ・ゴダイ・パッパ・オロハ・コンスタンチ・ホラ・コロテル（エデンの園）・十万のパライソ（極楽世界）である。[七] 次に、日、月、星を創り、数万の天使を思うままに召し寄せられた。

大天使ルシフェル（サタン・悪魔・仏）は七天使の頭、一〇〇相の位、二十二相の装いをもつ。[八] また、デウスは万物を創造され、土・水・火・風・塩・油にご自身の御骨肉を入れ、月・火・水・木・金・土、その七日目に人間の五体を創造された。デウスは、ご自分の息を吹き入れて、人間を「主日のアダン」と名付け、三十三の相を与えられた。[九] こうして週の七日目は祝日となった。

また、デウスは女を一人創造され、「主日のエワ」と名付けられ、二人を夫婦とされた。二人は、この世界においてチコロウ、タンホウという男女二人を生んだ。[十] エワとアダンは、毎日デウスを礼拝するためにパライソ（天国）に赴いた。[十一]

ルシフェルは、デウスの留守を見計らって、数万の天使をたばねて、

「我ルシフェルは、デウスである。よって、これからは我を拝め。」

と言った。これを聞いた天使たちは喜んで彼を拝した。

それを聞いたエワとアダンが「私たちはデウス様を拝むべきだ」と互いに論じ合っていると、そこにデウスが戻られた。ルシフェルを拝んでいた天使たち、エワとアダンは、「はっ」と手を合わせてデウスを拝した。この時に、過ちを正すときに唱える「コンチリサン（後悔）の祈り」が出来た。デウスは、

「ルシフェルを拝んでも、マサン（りんご）の木の実は、決して食べてはならない。さあ、エワとアダンの子どもをここに連れてきなさい。善い洗礼名を授けてあげよう。」

と仰せになった。この情け深い御言葉に、みな我に返った。[十二]

これを聞いたルシフェルは、エワとアダンを謀ろうと、エデンの園に急いだ。そしてマサンの木の実をとって、エワとアダンがいる所へ行き、

「アダンはどこにいるのか」

と聞いた。エワは、

「天国の門番をしています」

と答えた。するとルシフェルは、

「我はデウスの使いである。その方の子どもの洗礼名を授ける、というデウスの御進言、急いで子どもを使わせよ。」という。エワはそれを真実と思い、

「これは遠いところをご苦労様であります。それはそうと、あな

その子孫たち（カクレキリシタン）は、現在まで、四五〇年以上の月日をかけて日本のキリスト教史を紡いできた。彼らは、『天地』において、外海の大地は、神から与えられた世界郷土として認識し、神の愛が自分たちに向けられている、と解釈する。そこには、ひたむきな信仰世界が継承されている。だからこそ、彼らは、殉教ではなく、生き延びる道を選択してきたのだとも考えられよう。隠れキリシタンは「後生の助かり（来世の救済）」という希望の教えを伝承し、生きつづける糧(力)としてきた。『天地』は、キリスト教が日本の大地に実生化される過程において、内発的に語り伝えられた記録として、また、彼らの生活に浸透した信仰と希望の物語（民衆の神学）として思想的に大きな意義を持っているのである。

『天地』は三部構成（旧約・新約・黙示録）で神話的世界観を展開している。本稿では、字数の制約上、前編と後編の二部に分けて掲載される。前編で紹介される『天地』におけるデウス（神）の概念は、悪魔、裏切り者を徹底して救われる寛大な神として描かれる。丸や（聖母マリア）は天女として描かれ、蝶が口に飛び込むという美しい描写によって受胎の場面が描かれる。しかし、丸やは未婚で懐胎したことによって、両親から勘当され、避難を余儀なくされる羽目に陥る。生後の幼子の割礼を目にした丸やは、子の将来を思い、涙する人間的な女性としても描かれる。救い主イエスは、当時の日本の貧しい農民や漁民、その貧しい生活ゆえに間引きを余儀なくされて死した幼児の贖罪者として描かれる。

本稿の後編においては、博士と議論するイエスが、寺の坊主と問答するイエスとして書かれる他、当時の宗教社会における神仏習合の影響から、悪は「穢れ」として解釈される。イエスを裏切る弟子のユダが「天狗」の形相で描写され、自死さえしなければ助けたのに、というイエスの言葉や「お授け」（洗礼）という儀式が、死後のアニマ（魂）の救いにおいていかに重要であったかが描出されている。またその関係性からキリシタンの間では火葬が禁ぜられた所以が語られるなど、道徳性やタブーも導入されている。

外部からの往来がほとんどなかった長崎県の外海地方であるが、現在では遠藤周作の記念館、道の駅が建設され、人々の往来が頻繁に可能となった。日本のカトリックのルーツとされる外海、静かな町が、現在では観光スポットの一つになっている。

「日本の隠れキリシタン（かくれ切支丹）の頑強さと執念とには感嘆はするものの、彼らの宗教は我々現代人に何の説得力もないし、宗教としての一般性もない。それは狭い地域の、ごく限られた人たちの特殊な習慣的信仰にすぎない。我々は彼らの組織や行事に一時は興味を持つ…（中略）もはや、このかくれ切支丹なるものがいつかは消え去ることは明らかである。」と評したのは遠藤周作（一九二三～一九九六）であった。[四] しかし、彼は同時に、「彼らの宗教は、日本的、日本人の宗教意識に即したものとして本物である」と評価した。私は、今後の隠れキリシタンの末裔たちの行方を危惧しつつも、評価し、見守り続け、また伝え続けることが一研究者の使命であると考え、ここに『天地始之事』の現代語訳を試みる。[五]

【研究ノート】

長崎に伝承される聖書物語『天地始之事』現代語試訳（前編）

長谷川（間瀬）恵美

キーワード　カクレキリシタン、キリスト教、実生化（みしょうか）、インカルチュレーション、天地始之事

はじめに　―その現代的意味―

一八六五年に、浦上の潜伏キリシタン、ドミンゴ又一は、一冊のキリスト教の教理本をプチジャン神父（一八二九～八四）に手渡した。そこには、約二五〇年にわたる潜伏期間に長崎の隠れキリシタンが、口伝継承した神話、旧約・新約聖書物語（天地創造から楽園追放、マリアの処女懐妊、イエスの生涯、最後の審判、および黙示録までの内容）が描かれてあり、表題には「天地始之事」と記されてあった。ところが後日、プチジャン神父と長崎教区の副司教サルモン神父は、これを「奇怪な伝説を交えた、取るに足らないもの」として処分してしまった。

約一世紀後の一九三一年、田北耕也氏は、『天地始之事』を全部暗誦していた九十一歳の紋助爺と最後に会っている。そして氏は、西彼杵半島東樫山に住む下村善三郎が所持した写本『天地始之事』を底本とし、校注を加え、『キリシタン書・排耶書』として収録した。[一]

私は、田北氏が収録した『天地始之事』（以後『天地』と略）を現代語訳し、不足分を補い、大意を加えて広く人々に紹介することにした。『天地』は、日本に実生化（みしょうか・インカルチュレーション）されたキリスト教の一形態として、神学・宗教学的に評価されるべき作品であると考えたからである。[二]

『天地』は、長崎の隠れキリシタンの間で、彼らの生活・慣習と融合され、様々な変容の道をたどった。ポルトガル語の転用や、原典（聖書）からの変容、また自由な解釈も加えられている。しかし、それでも『天地』には、彼らの隠れた信仰が思想として形成されており、日本の宗教的特性の一つの型を見出すことが可能である。『天地』は、日本のキリスト教史において民俗・民間伝承として民衆の間に根付いた「信仰の形」、つまり表象的テキストとしての役割を持つと言っても過言ではない。[三]

長崎県外海地方の潜伏キリシタン（隠れキリシタン）、そして